

ひとを愛し、人に愛されることの喜びを知り、  
その上、子の親となるうとして喜ぶのは、今、  
女として至福のまっ只中にいる。

いくら隠そうとしても隠し切れない充足感が、  
喜乃の身体のそここから輝き、溢れているの  
が、露には目がくらむ程、眩しく見えた。

「おなごは、身ももって、子を生み、育てている  
時が、一生のうちで一番きれいな時期や、子花  
が咲く、いうてなあ……。」

母のフミはよくそう言っていた。  
天性の美貌を持つ喜乃に、さらに美しく子花  
を咲かせたのは、ほかならぬ自分の夫、信次なの  
である。

「いいえ……。子供は生まれたらすぐ、わたしが引  
き取ります……。」

露の口から、決然とした言葉が放たれた。  
「奥さん！」

「信次の子は、つまり長山家の嫡子です。放つと  
くわけにはいきません。」

ことわつときますけど、信次が引き取るんやの  
うて、わたしが母親として引き取るんです。」

襲ってくる敗北感をはね返すように、露は彫り  
こむような口調で、何ども繰り返した。

がつくりとうなだれる喜乃の背後に、喜乃をか  
ばうように立ちはだかつている信次の姿が、露  
にはありありと見えていた。

露は夜叉になっていた。生まれたばかりの子と  
母親を引き離すことが、どんなにむごいものか。  
夜叉になっている露には、思いやるゆとりがなか  
った。

島から帰った露は、その夜から高熱にうなされ  
た。

夢の中には、母のフミが、しばしば現われた。

(お母さん……)

今、露が縫りつけるのは、フミしかいなかった。

だが、そのフミは、とり縫ろうとすると、必ず首  
を横に振った。

(しつかりと生きていかないかん、露。何や。気

の弱いことを言うて……。あなたには、子育てとい

う大きな仕事があるでしょうが)

(子育て?)

(生まれてくる子は、あなたの子や。この前、女  
木であんた自身がそう言うたやろ。生んだ母親も、  
育てる母親も、母親に変わりはない。しつかりし  
て。露。)

露は、うつつに涙を流した。

(お母さん、女というものは……ほんまに、つら

い……)

フミは悲しみをこめた眼で、娘を見つめてい  
た。

(信次さんの気持ちもわかってあげてなあ。あの

人は、わがままやけど、根は気のやさしい人（ひと）  
やで：）

（けど：）

話し終わらないうちに、いつもフミは消えた。

そんな露の枕もとに、信次は大てい坐っていた。しかし、腕を組んで、熱に浮かされる露を撫然と見ている信次の眼にあるのは、ただ困惑の色だけであつた。

昭和三年五月四日、喜乃は男の子を生んだ。

夕闇と残照の織りなすふしぎな明るさがいっまでも漂い、その色あい在家並や田園をおだやかに包んでいる五月おわりの夕べ。

信次は、赤児を懐深くかかえて戻ってきた。

肩をいからせて捧げ持つように恐る恐る抱いていた子を、玄関に出迎えた露に渡すと、信次は、

ほっとした表情になった。

「赤児とは肩の凝るもんじやのう。」

言いながらも相好を崩して、露の腕に移した

赤児を眺め、

「おお、目を覚ましたぞ。なかなかええ子じやろ

うが。」

と指で子の頬を軽くつついたりした。

露は、ふしぎな気持ちであつた。

自分の胸に赤児がいる。かたわらには信次が寄り添っている。二人で赤児をあやしなながら笑顔で

話している。

自分たち夫婦の間に、こんな光景が訪れるな

どと、かつて想像したことがあつただろうか。

露は昨夜、殆ど眠っていないかつた。

喜乃と赤児の別れの場面が、何度も頭をよぎ

つた。赤児を抱いた信次の姿を想像しては胸を

灼いた。

そして、赤児を抱きとつた時の自分が鬼女に

一変するのではないかと思うと、それがもつと

恐しかった。

きれぎれの思いを紡ぎながら、短夜を転々と過

ごした露であつたが、今、ふところの中に小さな

命の重みを抱きとつた瞬間 思いがけない変貌

をとげた自分を発見していた。

「よしよし。母さんがお乳を作つてあげような。」

自然に言葉が口をついて出た。

しつかりと抱き直すと、赤児は安心したように

黒い瞳でまっすぐに露を見た。その瞳に露の顔

が映っていた。

（この子の見ているのは、わたしという母親の顔

なんや：）

まだ何も見えていないはずの赤児の瞳だが、

はつきりと見つめられていると思うことで、露は、

もろもろの雑念が、みるみるうちに洗い清められ

る気がした。

胸の奥底から透명한感動が、静かに湧き上がつ

てきた。

「お前は……お前は……わたしの子や。わたしの生んだ子や……。」

思わず赤児に頬をすり寄せた。甘酸っぱい乳の香りが鼻をくすぐった。

黄色い麻の葉模様の赤児の産着に顔を埋めて、露は涙を流した。

そんな露を、かたわらの信次がじっと見ていた。玄関脇の柿若葉がむんむんする色に萌え、うすみどりいろのこもび廊下にも畳にも明るい影を落していた。

「長山家の嫡男じゃ。嫡男のお越しじゃ。」  
信次が急に大声を張り上げると、わざと音を

立てて廊下を奥へ歩いた。

露はあとを追わなかった。赤児を抱きしめたまま、緑色の木洩れ日の中に立ちつくしていた。そうやっていると、赤児が、さながら自分の生んだ子であるかのように露には思われた。そして、子が産道を通るとき痛みにも似た感触が下腹部に伝わってくるのを、何のふしぎもなく受け入れている自分を見出していた。

（わたしは石女やない……この子を生んだ母親や……）

声にならない声で、露は何度もくり返した。  
今の露の中には、どこを探しても、子を手放した喜乃への思いやりの片鱗を見つけることは、で

きなかった。

数日後、赤児は圭吾と名づけられた。

言葉を尽くして引きとめる信次をふり切り、産後間もない喜乃が、友人をたよって女木から大阪へ旅立ったのは、くちなしの香りがどこからとなく漂ってくる六月の夜のことであった。

昭和二十年八月十五日、日本ははじめて外国との戦いに敗れた。長い長い泥沼戦争であった。終戦になる一か月少し前、高松市は空襲で市街地の約八割を焼失した。

灼熱の太陽の下に瓦礫と化した扁平な町がどこまでも広がり、死臭の漂う中を、住むところのない人々がさまよった。

市街地から川一つを隔てただけであったが、長山家のある飯内村一帯は戦火にも見舞われず、表面的にはおだやかな日々が続いていた。

圭吾は十七歳になっていた。  
中学生になってから、そのおもぎしが、驚く程、父、信次に似通ってきた。いや、おもぎしだけではなく身体つきから、歩き方、何気ないしぐさの一つ一つまでが、信次の若い日を見るようであった。

だが、常に狷介な表情をたたえていた信次と

異なり、圭吾には、人を包みこんでしまうような  
温かさが身体全体からにじみ出ていた。

子供の頃は、信次によく叱られては泣いていた  
圭吾である。

「そんなことで、長山家の跡取りがどうする！」

信次ははがゆがってよくどなりつけたものであ  
った。しかし、露は、そんな圭吾の中に、人間と  
しての天性のやさしさを見出していた。

露は、胸ふくらむ思いで、圭吾の成長を見守  
ってきたのであった。

四代続いた長山家の歴史を、くつ返すような大  
きな転換期がやってきたのは、昭和二十年の暮れ  
であった。

十二月から政府の手によって行われ始めた

農地改革は、地主たちを大恐慌におとし入れる

ものであった。先祖からの土地を他人に耕作させ

て小作料を納めさせ、独特の階級意識の上

に住していた地主たちは、足もとがくつがえる

ような不安にさいなまれた。

地主も小作農も平等に、自作農として新しい

出発を始めることになったのである。それにし

ても、先祖伝来の耕地を手放さねばならなくなっ

た地主たちの苦慮は大へんなものであった。異論

も不満もあつたが、敗戦国日本が、戦争に勝つた

連合国総司令部の覚え書によって行うものであ

る以上、ただ、唯々諾々と従う以外、道はなかつ

た。

(以上3月31日放送分)